

小学校国語科教科書掲載作品 「ヤマタノオロチ」の再話作品としての特徴について

原 田 留 美

新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

How the Legend of “Yamata-no-Orochi” is Rewritten for Primary-School Japanese Language-Education Textbooks

Rumi Harada

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

学校図書から発行されている小学校国語科教科書には、きさかりょうによるヤマタノヲロチ退治神話の再話作品が採用されている。古事記の神話を基にしているこの作品では、子ども達に親しみやすい作品となるよう、どのような工夫がなされているかについて明らかにするために、古事記ならびに他の絵本作品と比較した。その結果、独立した物語として親しめるよう、前段との繋がりに極力触れない書き出しになっており、それに対応して、草薙剣のアマテラスオオミカミへの献上の下りが省かれている、高天の原から降りてきたスサノオノミコトと地上世界の神であるアシナヅチとの間に明確な階層差を設けていない、グロテスクな描写を省きオロチ退治の場面の描き方をあっさり描くにとどめている等の特徴があることが分かった。原典に寄り添いつつ、幼い読み手にとって親しみやすい再話となるよう工夫されている作品であると言える。

キーワード

再話、小学校国語科、伝統的な言語文化、日本の神話、ヤマタノオロチ

Abstract

A recently-published textbook for teaching Japanese in Japanese elementary schools contains the myth of the "Conquest of Yamata-no-Orochi" as retold by Ryo Kisaka, based on the classical myth in the *Kojiki*. The present paper compares this retelling with other versions found in picture books for children as well as with the original *Kojiki* version, in order to elucidate the elements designed to make it more interesting to elementary-school-age children. First, it was found that the Kisaka version begins in a way that disconnects the narrative almost completely from the contents of the section immediately preceding it, thereby facilitating the enjoyment of an independent story. Also for this purpose, a description of the offering of the Kusanagi Sword to the goddess Amaterasu-O-Mikami is entirely omitted. Furthermore, there is a blurring of the distinction between the high status of Susano-no-Mikoto (who descends from the heavenly realms called Takama-no-Hara), and the lower one of Ashinazuchi (who merely dwells upon the earth). Other elements include the omission of graphic details involved in the conquest of Yamata-no-Orochi, simplifying and softening the effect for children. Overall, the adaptations in the retelling therefore made the myth more accessible and enjoyable for young readers, while nevertheless remaining faithful to the original *Kojiki* version.

Key words

retold stories, Japanese-language education in elementary school, traditional linguistic culture, Japanese mythology, Yamata-no-Orochi

I 目的と方法

平成23年度から全面実施の小学校学習指導要領（第2章第1節 国語）には、伝統的な言語文化に関する事項に「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせ聞いたり、発表し合ったりすること。」との記述がある。また小学校学習指導要領解説（国語編）には「神話・伝承については、古事記、日本書紀、風土記などに描かれたものや、地域に伝わる伝説などが教材として考えられる。その際、児童の発達の段階や初めて古典を学習することを考慮し、易しく書き換えたものを取り上げることが必要である。」とある。平成26年度時点で使用されている各社の小学校低学年用教科書のいくつかは、これら対応した教材として、日本の神話の再話作品が掲載されている。

教科書に採用する場合に限らず、絵本等に書籍化する場合も同様であるが、小学校低学年、あるいはさらに幼い子どもたちをして古語で描かれた物語、古典文学に親しませる場合には、わかりやすい現代語を用いて書き改めること、再話が一般的には不可欠であろう。ただ、子どもを読者として想定して古典文学作品を書き改める場合には、単なる現代語訳ではすまない問題がいくつか出てくる。たとえば、古典文学の中には長い物語も多くあるが、発達段階に配慮してそれらの一部を切り取って書き改める場合には、原典の性格や構成、前後の文脈に留意することが重要となる。単に切り取っただけでは、物語の筋や構成要素等の意味・必然性が分からなくなることもあるからである。また古典文学は、制度、文化、生活様式、価値観等が現代とは異なるそれぞれの時代社会の中ではぐくまれたものであるため、現代の子どもはもとよりおとなであってもすぐには理解しがたい点が多々ある。そのようなところをいかに扱うかも課題になってこよう。古事記や日本書紀等

の神話を再話する場合も例外ではなく、以上のような課題に対して相応の工夫が求められる。

筆者は以前、現行の小学校教科書に採用されている「いなばのしろうさぎ」再話三作品について、作品論の立場からそれぞれの特徴について考察・整理したが¹⁾、今回は『みんなと学ぶ小学校こくご』二年上（学校図書）収載の「ヤマタノオロチ」（きさかりょう）の、再話作品としての特徴について整理することを目的とする。そのため、原典の神話（次節で述べるとおり、古事記のヤマタノヲロチ退治神話と考える）との比較を試みる。また、平成11年～12年にかけて、当時市販されていたヤマタノヲロチ神話の再話作品のうち、小学校低学年以下向け児童書ならびに紙芝居作品のテキストを分析して再話作品としての特徴について整理をしたことがあるが、その結果も踏まえることとする²⁾。

以下、きさかによる再話作品をきさか版と称することとする。再話作品中の神名・大蛇名については引用部分を除きスサノオ（もしくはスサノオノミコト）・アマテラスオオミカミ・ヤマタノオロチで統一し、古事記・日本書紀中のそれらについてはスサノヲノミコト、アマテラスオホミカミ、ヤマタノヲロチ等と表記することとする。

なお、本稿で中心的に取り上げるのは小学校国語科の教科書に掲載されている作品であるが、具体的な授業展開等を念頭に置いての教材研究に直接的に資する研究を目指すものではなく、テキスト分析を手がかりに作品の有り様を探ることを目的としたものであることを言い添えておく。

II ヤマタノヲロチ退治神話の再話の際の問題点

再話作品を分析する前に、きさか版が扱っていると考えられるヤマタノヲロチ神話の出

典について整理しておく。きさか版の物語の流れは以下のようになっている。

- ・天の、たかまのはらを追われたスサノオノミコトは、出雲国のとりかみという土地に来る。
- ・そこにある、ひの川の川上から箸が流れてきたので、川上へ行く。
- ・泣いている老夫婦（アシナヅチ・テナヅチ）と娘（クシナダヒメ）に会う。
- ・三人が泣いている理由を問うと、もうじきヤマタノオロチが娘を食べに来るからだとの答えが返ってくる。スサノオノミコトはオロチ退治を申し出て、退治できた時には娘を嫁にしたいと言う。
- ・アシナヅチらに素性を尋ねられ、アマテラスオオミカミの弟であると答え、名も名乗る。それを聞いて、アシナヅチらは申し出を受け入れる。
- ・スサノオノミコトは魔法でクシナダヒメを櫛に変え、自分の髪に挿す。
- ・アシナヅチらに、強い酒を用意し、家のまわりを八つの門のある垣根で囲い、内側の八つの座敷に酒を入れた瓶を置くよう伝える。
- ・ヤマタノオロチがやってきて、酒を飲んで酔いつぶれる。
- ・スサノオノミコトは剣でヤマタノオロチの八つの頭を切りおとし、尾も切る。
- ・一本の尾から剣が出てくる。
- ・退治が終わり、クシナダヒメを櫛から元の姿に戻す。
- ・スサノヲノミコトはクシナダヒメと結婚し、すがという土地を気に入り御殿を建てて住む。

このような流れを持つヤマタノヲロチ退治神話は、古事記上巻ならびに日本書紀神代上第八段本書に見える。しかし、日本書紀の本書には使われていない「たかまのはら」の語が使われていること、天から降り立った場所の地名「とりかみ」が出てきていること、テ

ナヅチがオオヤマツミノカミ（山の神）の子であることが明示されていること、ヤマタノオロチ退治のための仕掛けに垣根が使われていることなどから、主として古事記に拠っていると考えられる。

よって以降は、古事記の神話を再話している作品としてきさか版を見ていくこととする。

ところで、古事記のヤマタノヲロチ退治神話を切り取って子ども向けに再話する場合には、具体的にどのような点が問題になるだろうか。

筆者は、前掲の論文（原田：1999ならびに原田：2000）において古事記のヤマタノヲロチ退治神話の再話絵本等について分析を試みた際、次の四つが問題点として見いだせると考えるに至った。一つめは、この神話の前に置かれている話との繋がりをどうするかということである。古事記のヤマタノヲロチ退治神話は、黄泉国から戻ったイザナキノミコトから生まれた三貴子のうち、スサノヲノミコトだけが母を恋い父から任せられた領域を治めず昼夜泣きわめいていたため、母の国である根の堅洲国へ行くよう父から言い渡され、その途中、姉アマテラスオホミカミに挨拶をするつもりで高天原に昇ったがそこでの乱行をとがめられ下界に追放される、という流れの後にある。スサノヲノミコトが出雲国にやってきたのには以上のような背景があるのだが、このことをどの程度再話の中に入れるかが問題となる。前段に詳しく触れすぎると物語が長くなりすぎるためというだけではない。スサノヲノミコトの印象が、前段とヤマタノヲロチ退治の段とではかなり異なっているからである。煩雑になるためここでは詳細については割愛するが、スサノヲノミコトは物語によって相当に異なる貌を見せる神である。ここでも前段においては天上界から追い払われるほどの乱暴者であったのが、地上に降りたとたん怪物退治の英雄となっている。アシナヅチらに素性を明かす際にも犯した罪

については一切言及されることなく、至高神アマテラスオホミカミの弟という出自の高さだけが提示されている。現代の我々からすれば、繋がりの悪さ、あるいは矛盾を感じざるをえないところがある。だからといって、前段との繋がりに全く触れずにおくと、主人公がなぜ出雲にやってきたのかがわからず、物語の始まり方が唐突な印象になることが避けられなくなる。

二つ目は、スサノヲノミコトとアシナヅチらとの関係である。両者の出会いの場面において、古事記ではスサノヲノミコトがアシナヅチらに対していきなり名を問い、次に泣いている理由を問うている。現代の我々からすれば不自然にも見える展開であるが、日本書紀神代下第九段一書第一の皇孫降臨の条においてアマノウズメとサルタヒコノオホカミが対峙する場面3)にも見えるように、上代においては名乗りというものは、先に下位の者から上位の者に対して行うのが通例であった。すなわちここからは、古事記が両者の間に明確な上下関係を設けていることが理解される。古事記のスサノヲノミコトは、高天原と関わる神、天つ神として登場しており、一方アシナヅチは山の神の子、すなわち地上世界の神である国つ神として位置づけられている。古事記では天つ神と国つ神の間には上下関係が見られるが、ここにもそれが反映されているのである。初対面の相手に対して上からものを言うスサノヲノミコトの態度をどのように扱うか、スサノヲノミコト像の造型の点からも、子どもたちに向けて再話する場合には工夫が必要だろう。

三つ目は、スサノヲノミコトがヤマタノヲロチを切り伏せる場面をどの程度描写するかという問題である。ヤマタノヲロチ退治神話といえば、一般的には、恐ろしい怪物を知恵と勇気で倒す英雄の物語という印象がもたれやすいのではないかと考えるが、古事記ではこの部分は「爾速須佐之男命拔其所御佩之十

拳劍、切散其蛇者、肥川変血而流。」とあるのみである。英雄の物語として印象を強めるのならば、この部分を詳述することも考えられるが、その際には再話者による創作的な工夫が必要になる。また、他の場面とのバランスを考える必要もあろう。

最後に、大蛇の尾から出てきた劍の扱いである。これは三種の神器の一つ、草薙劍であるが、古事記ではアマテラスオホミカミにスサノヲノミコトが献上したことになっているが、その理由については「思異物而」、つまり不思議に思っていると述べるに留まっている。スサノヲノミコトがアマテラスオホミカミに神宝を献上するというをどう捉え表現するか、これは1番目の問題、すなわち前段との繋がりをどの程度取り入れるということとも関わることであるが、子どもたちが納得できる形でまとめる工夫が必要となるだろう。

以上、ヤマタノヲロチ退治神話を再話する場合に問題となる主な点を四つ挙げたが、次節では、これらの問題にきさか版がどのように対応しているかについて、原典の古事記ならびに、分析の結果上記の問題点を見いだすこととなった再話作品（赤羽末吉・舟崎克彦による『やまたのおろち』、以下、赤羽・舟崎版と称する。西野綾子による再話の『ヤマタノオロチ』、以下、西野版と称する。）との比較を通してみていくこととする。

III 前段との繋がりと草薙劍の扱いについて

初めに、前段の神話との繋がりをどうするかについて。この問題は、四つ目の、草薙劍の扱いとも関わるため、まとめて考えていくこととする。

きさか版では次のようにして物語が始まっている。「天の、たかまのはらをおわれたスサノヲノミコトは、下界の、いづものくにのとりかみという土地に、やってきました。そ

こには、ひの川がながれていました。」

ここからわかるのは、スサノオノミコトが天を追われて出雲にやってきたということだけである。追われた事情の詳細については全くふれられていない。このような始まり方は、かつて調査した市販の再話作品とは異なっている。たとえば、赤羽・舟崎版では、高天の原でさんざん乱暴を働いた咎で追放されたことが最初に述べられている。ただし、そのような結果に陥ったことについてスサノヲ自身がどう考えていたかについては、物語の冒頭では触れられていない。一方、西野版では、高天原でわるさを働いたため追放されたことを後悔しながらスサノオが地上をさまよっている場面から物語が始まっている。

「須佐之男の命といえは 神々の国一高天原にきこえた あらくれものだ」という始まりになっている赤羽・舟崎版と、意気消沈するスサノオの心理描写を丁寧に綴る西野版とでは、スサノオ像に大きな違いがあるが、前段との繋がりを意識した始まりになっている点では共通していると言える。

これに対してきさか版は、前段との繋がりに筆を割かない。そのことにより、前段の神話に気を取られることなくヤマタノオロチ退治神話の物語への関心が引き出されやすい始まり方になっていると言えるだろう。

さらに、以上のような各再話作品における前段との繋がりの意識の仕方の違いは、物語の最後での草薙剣の扱い方の違いと関わっていると考える。すでに述べたように古事記ではこの剣はアマテラスオホミカミに献上されているのだが、きさか版ではそのようになっていない。

とちゅう、つるぎのはがかけました。ふしぎにおもっておを切りさいてみると、中に、みごとなつるぎが入っていました。

こうして、ぶじ、オロチたいじがすむと、ミコトはむすめをくしからもどしまし

た。

スサノオノミコトとクシナダヒメは、けっこんをしてすむところを、あちこちさがしました。

上のように、剣の処置に関する言及がないが、これには、物語の始まり方と深い関わりがあると考えられる。冒頭、高天原での詳細なきさつには触れずにおきながら、剣の献上をすることにしては、一貫性が欠けることになるからである。結果、完結性の高い独立した物語として楽しめる作りが顕著な作品になっていると考える。

これに対して、追放につながった高天の原での行状をどのように自己評価したかについて物語冒頭では語っていない赤羽・舟崎版では、「命はその剣を、わびのしるしに天照大御神にさしあげることにした。」となっている。「高天原にきこえたあらくれもの」として登場し、その後大蛇をも倒したスサノオの、しおらしい、すなわち人間的な面がさりげなく読者に伝わる作りとなっていると言えよう。また、作品の冒頭でスサノオが高天原での乱暴を反省しつつ登場している西野版では、「このりっぱなつるぎは、じぶんがもっているよりも、天の国の 高天原にいる

お姉さんのアマテラスに さしあげたほうがいい」ということで献上がなされている。剣の所有者としての格を備えているのは自分ではなく姉の方であると判断したことを通して、冒頭で示されていたスサノオの反省の気持ちの本物であったことが読者に伝わる作りとなっていると言えるだろう。

以上のように、前段との繋がりを示す物語の冒頭部と、物語の結末部分にある草薙剣の扱い方に関しては、三作品各々独自性を認めることができるが、同時に、個々の作品内ではこれらがそれぞれ対応していることが確認できる。ただし、前段との繋がりと草薙剣の扱い方が対応していることが作品の作りにも

たらしめている影響は、赤羽・舟崎版ならびに西野版と、きさか版とでは異なっていると考える。赤羽・舟崎版ならびに西野版では、上記の対応によりスサノオ像にまとまりがもたらされていると考える。出雲に来る前の、高天原で罪を犯したスサノオ像と、出雲で怪物オロチを倒した英雄的スサノオ像がうまく融合されており矛盾を感じさせるところがない。これに対してきさか版は、そもそも出雲でのオロチ退治以前の物語に注意が向きにくい作りになっている。前段との繋がりそのものを薄め、草薙剣の献上の下りを取り入れないことにより、作品単独での完結性の高い再話作品となっている点に特徴を見出すことができるものとする。

IV スサノオノミコトとアシナヅチらの関係について

次に、スサノオノミコトとアシナヅチらの関係について見ていく。きさか版では、川上の立派な屋敷の前で泣いているアシナヅチ夫婦とクシナダヒメを見たときに、このように言っている。

「どうして泣いているのですか。」

これに対してアシナヅチは、自分がオオヤマツミノカミの子であることと自分の名前、そして、ヤマタノオロチに娘が食べられてしまうことを語る。一方古事記ではまず名を問う、それにアシナヅチが答えた後に泣いている理由を問うている。そのようになっている理由についてはⅡに既に述べたが、現代人の我々の感覚では、何か困ることがあって泣いているであろう人に対しては、事情を先に尋ねる方が自然で、いきなり名前を聞くことは一般的にはまずしないであろう。きさか版はそのあたりを踏まえて読者が戸惑わないよう配慮していると考えられる。

さらにその先を見てみる。きさか版では、アシナヅチの事情説明を受けて、ヤマタノオロチとはどのような怪物なのかを尋ねている。そして、アシナヅチの答えを聞いた後は次のようになっている。

スサノオノミコトはむしゃぶるいをしました。

「わたしが、そのオロチをたいじしてあげましょう。もし、みごとたいじできたら、むすめさんをよめにしたい。」

「そういうあなたさまは、どなたでございますか？」

「わたしはアマテラスオオミカミの弟、スサノオノミコトです。天の、たかまのはらからおりてきたばかりです。」

「さようでございましたか。たすかるなら、むすめもよろこんで、あなたのよめになることでしょうか。」

武者震いという表現によりスサノオノミコトにとってヤマタノオロチ退治がたやすいことではないことを伝えていることも含めて、自然な展開である。一方古事記では、ヤマタノオロチの姿についてのアシナヅチの説明の後すぐに、スサノオノミコトが「是汝之女者奉於吾哉」、おまえの娘を私に差し出さないかと持ちかけている。退治云々についての言及はないが、古事記編纂当時は、あえて語らずとも退治することは了解事項として認識されていたのだろう。

一方、西野版でもきさか版同様、スサノオはアシナヅチらが泣いている事情を真っ先に尋ねている。そして、オロチ退治を申し入れ、そのあとで「ところで、おまえのむすめの、クシナダヒメを、わしのつまに出来ないか」と伝えている。読者が違和感を抱きにくい展開になっている点において、きさか版と西野版には共通点が認められる。

他方、赤羽・舟崎版は、古事記に近いやり

とりになっている。スサノオノミコトがまずアシナヅチの名を問い、次に事情を問うている。けれどもその後では、「その、おろちとやらは、どのようなものだ」とスサノオノミコトが尋ねる際に身をのりだして問うたことが描かれている。退治に向けての意欲が言外に伝わる。そして、おびえた様子でオロチのことを話すアシナヅチに対して「ここなる姫をわしの妻にくれるのならば、おろちをたいじしてつかわそう」と申し出ている。退治をすることがはっきりと言及されている。絵本の折り込み付録によれば、赤羽・舟崎版は原典である古事記の主旨から逸脱しないよう再話することをコンセプトにしているが、このくだりに関してはわかりやすさへの配慮も必要という判断が働いたものと推測する。

なお、きさか版はスサノオノミコトのアシナヅチらに対する言葉に敬体を用いている。さらに、スサノオノミコトが素性を明かした場面でも、アシナヅチは驚いたり平伏したりすることなく「さようでございましたか。」と受け止めるに留まっている。これらは、西野版や赤羽・舟崎版には無い特徴である。

以上、スサノオノミコトとアシナヅチらの関係についてみてきたが、現代の読者に配慮しつつ最も古事記に近い形で再話している赤羽・舟崎版、現代の読者が違和感を抱かない程度に上下関係を設けている西野版に対し、きさか版は、天つ神と国つ神をよりフラットな関係で描いている点を特徴として指摘できると考えるものである。

V ヤマタノヲロチ退治の場面について

最後に、ヤマタノヲロチの描写とその退治の場面の描き方についてみていく。きさか版では、アシナヅチはヤマタノオロチについてこのように話す。「身体は一つ。頭としっぽは八つ。目は、ほおずきのように赤く、せなかはこけだらけで、ひのきや、すぎの木が生

えています。長さは八つの谷と、八つの山にまたがるほどです。」

内容の点ではほぼ古事記と同じだが、「見其腹者悉常血爛也」、腹はいつも血がにじんでいてしたたり落ちているというややグロテスクな部分が原典にはあるが、それは省かれている。また、オロチ登場の場面の描き方も詳しくはなく、「聞きしにまさるおそろしいオロチが、体をくねらせてあらわれました」となっている。さらに、退治の場面は次のようになっている。

ミコトはこしのつぎをぬくと、八つの頭をすばんすばんと切りおとしました。ふき出るちは、ひの川をみるみるそめていきます。

ミコトは、のたうつオロチの八つのしっぽも切りはじめました。

このあとは、尾から剣が出てくることが語られている。総じて簡単な描写にとどめている。

古事記では、ヤマタノヲロチ登場場面ではただ来たことについて言及しているのみである。また退治の場面は、十拳の剣を抜いてヲロチをずたずたに切りさき、その血で肥川の水が赤く染まったことを言うばかりである。

きさか版は、オロチの描写については古事記よりもあっさりとして、そしてオロチ登場や退治の場面では古事記に近い形で簡潔に表現している。

これに対して西野版は、オロチの様子は内容的に古事記に近い描かれ方になっているものの、オロチ登場の場面では古事記にはない恐ろしい様子に多く筆を割いている。退治の場面でも、オロチの抵抗の様子や、その抵抗も泥酔のために甲斐がないことなどについての言及がある。退治の場面については、スサノオの知恵が怪物に勝利する様子を印象づける演出が施されていると言えよう。

赤羽・舟崎版も、オロチの様子は古事記に近い形で描いているが、オロチ登場の場面には、「地なりがうしおのようにせめぎよせると、谷がきしみ、尾根がおたけびをあげる。」など、古事記にない風景描写が見られる。けれども、退治の場面は古事記のものに近く、体も切りさいたことへ言及が加わっている程度である。

ヤマタノヲロチ退治の場面における各作品の描写の違いは以上のようなものであるが、西野版と赤羽・舟崎版については、英雄の物語としての演出に力を注いでいる前者、おろちの恐ろしさの描写に工夫の見られる後者とまとめることができる。描写の力点の置かれ方に違いはあるものの、両者いずれにも、ヤマタノオロチの恐ろしさに言及することにより総体的にスサノオの勇猛さを浮かび上がらせるといふ工夫を見て取ることができる。それに対して、きさか版は、オロチの恐ろしげな描写や戦いの場面には筆を割いておらず、結果として、スサノオの英雄としてのイメージを強く印象づけることにはなっていないという特徴があることが指摘できよう。

VI 結論

きさか版について、四つの点から古事記や他の再話作品と比較してみたが、次のような特徴が指摘できると考える。

物語としての完結性が高く、前段(たかまのはらでの乱行)との繋がりに極力触れない書き出しになっている。そのため、物語の終わりの部分の、草薙剣のアマテラスオオミカミへの献上の下りはあつかわれていない。また、たかまのはらから降りてきたスサノオノミコトと、地上世界の神であるアシナヅチとの間に明確な階層差を設けていない。さらに、グロテスクな描写を省いたり、オロチ退治の場面の描き方をあっさり描くにとどめている。

古事記に対する知識がなくても戸惑わない

ような完結性の高さや、幼い子どもたちでも受け入れやすい人間関係等が認められる一方で、古事記原文の簡潔性を適宜生かしつつ過剰に刺激的な描写にならないよう配慮している。きさか版の再話姿勢には、上記のような特徴を認めるものである。

注

- 1) 原田留美. 伝統的な言語文化の再話作品の諸相—小学校国語科教材「いなばのしろうさぎ」の場合—. 新潟青陵学会誌. 2011; 4(1):13-23.
- 2) 原田留美. 神話と児童文学—スサノヲのヤマタノヲロチ退治神話について—. 精華女子短期大学紀要. 1999; 25: 87-102.

原田留美. 神話と児童文学その2—スサノヲのヤマタノヲロチ退治神話について—. 精華女子短期大学紀要. 2000; 26: 59-80.

上記二論文では、調査当時一般に流通していた以下の絵本並びに紙芝居の計4作品を考察対象とした。

赤羽末吉絵、舟崎克彦文『やまたのおろち』あかね書房 1997年。これは1983年にトモ企画から出版された絵本の復刻版である。なお、あかね書房版の折込付録によれば、トモ企画版の段階から、赤羽氏が中心になる形でこの絵本の企画が進んだということである。あかね書房版は2014年時点でも購入可能。

西野綾子文、西村郁雄絵『ヤマタノオロチ』ひくまの出版 1989年。なお、この書籍は2013年時点では市販されていたが、出版社倒産のため現在は入手困難である。

羽仁進文、赤羽末吉絵『やまたのおろち』岩崎書店 1967年。2014年時点でも購入可能。

川崎大治脚本、田島征彦絵『やまたのおろち』童心社 1990年。これは紙芝居作品。2014年時点では市販されていない。

Webcat Plus (<http://webcatplus.nii.ac.jp/>) で確認した限りにおいては、2014年11月

時点で市販されているヤマタノオロチ退治神話のみを再話した幼児向け絵本は、いわゆるアニメ絵本を除くと赤羽・舟崎版と羽仁版以外には見当たらない。

なお、上記4点の作品のうち、羽仁進によるものは創作的部分が大きく、古事記の神話の再話作品とは評価しがたい。また、紙芝居のものは、スサノオを初めとする登場人物の固有名詞を一切使用せず、ある若者とおろちとの戦いの場面に多くの筆を割いている。意図的に古事記の神話とは距離を取った作品であり、これも古事記の再話作品とは言いがたい。IIの最後で述べたように、本稿では、主として赤羽・舟崎版と西野版をきさか版との比較に用いるが、羽仁版ならびに紙芝居を用いなかったのは上記のような作品事情による。

赤羽・舟崎版ならびに西野版のテキスト比較表は、2)の二論文の巻末に資料として掲載している。必要に応じて参照されたい。

3) 皇孫、アマツヒコヒコホノニギノミコトが地上世界に降り立った折、行く手にある神が立つ。アマノウズメが使者として出向き、その神から名(サルタヒコノオホカミ)を聞き出すことに成功する。サルタヒコノオホカミは、皇孫降臨の先導役を務めることとなる、というくだりがある。

参考文献一覧

- みんなと学ぶ小学校こくご二年上. 東京:学校図書:2011.
- 赤羽末吉・舟崎克彦. やまたのおろち. 東京:あかね書房:1997.
- 西野綾子・西村郁雄. ヤマタノオロチ. 静岡:ひくまの出版:1986.
- 羽仁進・赤羽末吉. やまたのおろち. 東京:岩崎書店:1967.
- 川崎大治・田島征彦. やまたのおろち. 東京:童心社:1990.
- 原田留美. 日本の神話を補助教材としての扱う場合の問題点について―「いなばのしろさぎ」

- の場合―. 新潟青陵学会誌. 2010; 3(1):21-31.
- 原田留美. 伝統的な言語文化の再話作品の諸相―小学校国語科教材「いなばのしろさぎ」の場合―. 新潟青陵学会誌. 2011; 4(1):13-23.
- 原田留美. 神話と児童文学―スサノヲのヤマタノオロチ退治神話について―. 精華女子短期大学紀要. 1999;25:87-102.
- 原田留美. 神話と児童文学その2―スサノヲのヤマタノオロチ退治神話について―. 精華女子短期大学紀要. 2000;26:59-80.
- 松村武雄. 日本神話の研究第3巻. 東京:培風館:1983.
- 神田典城. 日本神話論考. 東京:笠間書院:1992.
- 大林太良・吉田敦彦監修. 日本神話事典. 東京:大和書房:1997.
- 山口佳紀・神野志隆光. 古事記. 東京:小学館:1997.
- 青木和夫ほか3名. 古事記. 東京:岩波書店:1982.
- 小島憲之ほか4名. 日本書紀1. 東京:小学館:1994.